

喜寿山行

河野 幾雄

1986年(昭和61年)
9月号(No. 495)社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 喜寿山行 河野幾雄……………(1)
海外の山……………(2)
「K2の悲劇」「日米交換登山アメリカの報告書から(下)」「韓国山岳会を訪ねて」
一本の古いビッケル 芳野超夫……………(2)
東西南北「会員通信」……………(3)
報告……………(3)
「第14回山岳史懇談会」「創立80周年記念ビッケル事業終了・門田正氏お見舞募金に関する報告・門田正氏夫人からの礼状」「ポーランド隊一行を迎えて」「ポーランド隊一行の来松」「ポーランド隊工場見学」「夕張岳に高山植物をたずねて」
図書紹介「山と峠と氷河」他5点……………(6)
ルーム日誌・会員移動……………(10)~(12)
図書受入報告 図書委員会……………(12)(14)
会員名簿[1985]の正誤表3……………(13)
木暮文庫目録(つづき)……………(13)
お知らせ……………(14)
「山岳図書交換会開催」他10件

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

お知らせ電話 234六六五九

「誰も祝ってくれないから、我々自分で祝おうや」という、谷口現吉会員の誘いで、慶応山岳部の明治四十三年生れが上高地の山研小舎に全国から集った。本年五月二十八日のことである。総員十二名、全部が喜寿というわけではなく、前後一、二年、多少のズレはあったようだ。只一人若いのが太田敬会員で、絵を描きに来て小舎にいたところを谷口氏にみつけ、早速、一行の世話役をやらされる羽目になった。「いずれは喜寿になるんだから、少し早いが仲間に入れ」と口説かれて、少々承知したらしい。学生時代、太田君は谷口君に散々しごかれた者の一人である。

山岳部の育成に心血を注ぎ、多くの有能な部員を育てあげて中興の祖といわれた。我々が入学する以前から、インドの三田幸夫先輩の「早く来い」という手紙が頻々とルームに届いたという。その夢を実現するためであったと思われる。しかし、折角育て上げた後輩も次から次と戦死してしまっただけで、手足をもぎとられた氏は戦争が終ると一転して本会の再建に努力し、マナスルの隆の功労者ともなった。それが認められて昨年は名誉会員の表彰を受けたことは知っての通りである。その昔、槍から縦走して来て涸沢の岩小舎に辿り着いた一行が、食器の跡片付けもせず、のびていたところ、リーダーの横さんが、だまっていた同の食

器を集め、それを洗いに下の沢へ降りて行かれたという伝説がある。いや、岩小舎で岩登りの合宿中だったという異説もあるが、いずれにせよ、横さんに食器を洗わせたのは事実のようである。私達の先輩はその話をするたびに「横さんにしごかれたのだ」という言葉を使って我々に教えた。我々の「しごき」とは、かくあるべしというのであった。

さて、こんどの話だが、我々は前夜の二十七日夜十一時、新宿西口のセンタービル前から上高地へ直行する松本電鉄の乗合いバスで出発した。乗客は満員で空席一つ無かった。翌朝六時、定刻に上高地ターミナルに着いた。バスを下りると、何はともあれ、常さんのお墓に直行した。ここにいる人間で、生前の常さんに厄介にならなかった奴は一人もない。冬季は勿論のこと、旅館の開いている夏季でも、我々の上高地の宿は天幕

か常さんの小舎ときまっていた。行けば常さんは祖父母が孫を可愛がるように、「さあ、食べなせ」「さあ呑みなせ」と歓待してくれる。生計の種の岩魚なども惜し気もなく振舞ってくれる。酔って寝てしまうと、布団を出して来てそとにかけしてくれる。常さんの酒の相手はとてども動まらないので、こちらは狸寝入りをしていたから、ちゃんと知っているのだ。だから、お墓の石にはこう刻んである。

「真実の人生に生きた内野常次郎君ここに眠る」 横有恒

お墓は河童橋に至る広い道の中程を右にそれた、六百山の裾の森の中にある。路も踏跡程度だし、立札一つ無いから、誰一人気付く人はいない。路には雑草が生えていたから、近頃は訪れる人も皆無なのである。

お詣りを終って山研小舎にいった朝食をこ馳走になったあと、三班に分かれて行動した。まずひと眠りという朝寝組、写真とスケッチの散策組、とにかく高いところという岳沢小舎組、私は第三班についていたが、小舎どころか、森林帯を抜け出てガレに出た途端に一同ダウンしてしまった。岳沢小舎のつもりで誰も弁当など持っていかなかったが、一人用意のいい奴がいて弁当を持っていた。サンドイッチからはじまり、果物、菓子、紅茶まで小さなリュックからいろいろの食べものが魔法の如く出てくる。五人で食べても余ったくらいだから相当なものだ。そこへ小舎に寝ていた筈の仲間が一人、下から登って来て、早速残り物にありついて喜んでた。「それにしても良くここが判ったな」と感心したら、「貴様達の来そうなどころだと思っただけで来た」と涼しい顔をされた。長い間の山仲間のつき合いは恐ろしいものだ。昔、歩き廻った懐かしい山稜を充分眺めて小舎に帰ったのが三時。谷口氏は買い出しに出掛け、肉屋へ行って四キロの肉を下げて帰った。「顔がきいて、うんと安くしてくれたよ」とニコニコしていたが、上高地に肉屋があるとは知らなかった。何処にあるのだろう。五時から開宴。早大山岳部を代表して鳴原啓佑会員から高価な洋酒を頂いたことが報告される

と、一同歓声をあげて大拍手。敵から塩を贈られた形だ。

各自の持つて来た名産品や旨いものが卓上に溢れ、その上、管理人ご夫婦の好意による山菜料理が異彩を放った。途中からはボーランド隊の助人にかけつけた若い会員も合流して夜の更けるまで歓談が続いた。

今回の山行で最も驚いたことは費用の安かったことである。その原因は運賃と宿賃にある。国鉄利用より安いバス代もさることながら、山研小舎に至っては、日本全

一本の古いピッケル

……成瀬さんと父との思い出……

芳野 尠 夫

ここに奇妙な形をした、古い一本のピッケルがあります。このピッケルについてお話しする時、私の亡父と故成瀬岩雄さんとの古い関係について申し上げねばなりません。昭和四十五年八十五歳で他界した父、芳野幹一は、大変な山好きで、私も子供の頃に関東の山々や立山等に連れて行ってもらいました。私の今日の山好きは、この父に負うものと思っています。父は亡くなるまで、山の話をよくしておりましたが、不思議なことに日本山岳会には入会せずに終りました。

父は大正時代には成蹊中学と同高等学校の教授をしていました。

国こ以上に安い宿賃は他に無かる。我々の学生時代の境遇は全く同じであった。しかし五十年以上たった今では、この長年月が各人の境遇に歴然たる経済的な差を生ぜしめている。出来るだけ多くの仲間を集めるためには先ず費用の安いことが何より必要である。安い会費は淋しい境遇にある友人に対する、谷口氏のあたたかい配慮であった。翌日は朝から雨が降っていた。ボーランド隊といれ代りに、我々は東京へ帰った。

大正七年成瀬さんが成蹊中学に入学された時から、父と成瀬さん、同時に故石原 巖（会員）赤星平馬、中屋健一（会員）等の成蹊出身の多くの優れた山の先輩方との、親しい繋がりが始まったようです。父はこの中学生の山好きを引連れて、しばしば奥多摩や日光連山等に出掛けようとして、特に成瀬さんは、追悼集にも載っておりますように、大正十一年九月の日光白根の旅や、その他赤城山、満洲旅行、北アルプス等の多くの旅行や登山を楽しんだようです。その頃、成瀬さんは何度も小石川に在った拙宅に山の話をしに見えたそうです、また何回も故三

海外の山

K2の悲劇

八千呎の高所と伝えられる、そのビバーク・キャンプで、七人のクライマーたちは、どのように死を迎え、また生をつかみとったか。十二人もの「強い」男と女たちが、なぜ、次々に最期を迎えなければならなかったのか。一九八六年夏、カラコルムの主峰、K2（八六一一呎）で起きた一連の悲劇は、ヒマラヤ登山史上前例のない、衝撃的なものだった。

分かった範囲の情報と、どんなクライマーたちであったかについては『山と溪谷』誌（十月号）でも書いた。重複する点はあるが駆け足で事実経過を追ってみる。

まず、六月二十一日、米隊のスモリッチ隊長ら二人が雪崩で死亡した。二十三日には、四人の国際パーティのうち、仏の有名なおしどりクライマー、バール夫妻が登頂後、下山途中で行方を絶った。七月に入って、ボーランドのククチカ、ピョートルフスキの二人が南壁から登頂したが、下山中の十日、ピョートルフスキが滑落し、南西稜からの単独登頂を目指したイタリアのソロ・クライマー、カーザロットも十六日、八二〇〇呎地点から、休養のためBCへ下山中、クレヴァスに落ちて死亡した。

八月に入っても、K2は果敢に挑戦するヨーロッパ人たちの容赦しなかった。まずK2挑戦三度目のボーランドのヴルシが登頂後、疲労から稜線に倒れた。その死を確認しながら、七人のクライマーが頂上に挑んだ。二人を除いて登頂に成功し

たが、嵐が一行を八〇〇〇呎のキャンプに閉じ込めた。英国の代表的な登山手、アラン・ラウスがテントの中で死んだのをはじめ、英女性のチュリス、オーストリアのイミツェルとウィーゼル、ボーランド女性のミョドヴィッチの五人が、テントの中で、あるいは脱出後、次々に死亡した。オーストリアのヴェテラン、ディームベルガーとパウアーの二人がかるうじて生還し、凄じかった八千呎での出来事を語った。

夫々の国ではもちろん、世界的にも知られた六ヶ国十二人のクライマーが、こうして帰らなかったのである。

想像もできない悪天候だった、と伝えられる。が、たとえば七人の遭難の直前には、韓国隊の三人が登頂を果たして無事下山している。遭難のケースはそれぞれ違うから、原因を一言でくくることはもちろん出来ない。それにしても無残な結果である。

バール夫妻には、ボーランドの女性クライマー、ワンダ・ルトキエヴィッチ、仏のバルマンティエが同行していた。ジャーナリストでもあるそのバルマンティエは、『バリ・マツチ』誌に、K2の一連の悲劇について書いているが、英国女性として初めて八千呎峰に立った（ブロード・ピーク）四十七歳のチュリスが、八月七日、テントで息を引き取ったとき、傍らに愛用の「サムライの刀」が置いてあったという。

ヨーロッパの精鋭が相次いで倒れた今年のK2の一連の事故は、ヒマラヤの将来をある意味で暗示しているように思われる。国の枠を越えて困難な登攀を求める者は今後とも跡を絶たないだろう。ヒマラヤが稀少価値を持っていた時代とは違う。軽やかな挑戦と、その結果としての死。もったいない、と思う。

（江本嘉伸）

枝守博(会員)さんのお宅にお邪魔して、色々山のことを勉強していたようです。

その時、確か大正九年のことと聞いていますが、成瀬さんがドイツ語の山の雑誌(名称不明)を持参し、ピッケルについての記事と使用法を父に読ませたことがありました。そこで父は、先代の片桐氏(テント店の)と相談し、その絵をもとに、当時農器具を作っていた荒川区町屋の渡辺鉄工所に特注して、見様見真似で二本のピッケルらしいものを作らせた。その中の一振りがこれです。この二振りのピッケルは、その後、成瀬さん等に父がお貸ししたりして昭和十年頃まで使われていました。

生前父がよく言っていました、これ等のピッケルは横さんがスイスから本物のピッケルを紹介される数年前、既に日本に在った最初のもので、国産第一号である筈だとのこと。

二本のうちもう一本は、父が大正十五年夏、剣の長次郎谷上部で滑落した時、停止に成功した命の恩人? ということで家に残し、今回はよく成瀬さん達が使われた方を、日本山岳会に父や成瀬さん等の記念として寄贈させていただき、後の参考として残したいと思っています。

これを作った渡辺鉄工所は、残念なことに、大正十二年の関東大震災後の消息が解らなくなっています。

り、昭和四十年頃、父に言われて探したこともありましたが、何の手掛りも得られませんでした。

ここで、亡くなられた成瀬さんに失礼かとも思いますが、私が日本山岳会入会のサインをお願いしに成瀬さんをお訪ねした時、成瀬さん自身が私の父の思い出話をされた後で、次のようなエピソードを内緒でお話しになりました。成蹊中学のある学期末、成瀬さんが父のところに來られて、進級が危いので内緒で問題を教えて下さいと、父がその時どうしたかは知りませんが、成瀬さんはその後、無事に高等学校に進み、東北大学へと進まれたわけですね。その頃、山岳会の会合でお会いすると、必ず「おい、達磨さん(父の渾名)は元気かい」。一度は、「あのピッケルはまだあるかい」と声を掛けて下さいました。

父は昭和二年成蹊から学習院高等科に移り、故加藤泰安さんや福岡孝行さん等の、多くの優れた山の先輩を教え子に持った幸せ者でした。

(編注 このピッケルは「山岳博物館」を考へる会に寄託されました。)



海外の山

日米交換登山アメリカの報告書から(下)

海外委員 中村 テル

小川山では先ずグレンと私はあちこち歩いて、写真も撮った。本当に美しかった。馴染み深いことはもつとも安心できることである。われわれは小川山レイバックに行き、岩場と旧交を暖め、私はリーダーで、それから注意深く単独でそのルートを登った。

次の日はいかにも起りそうな典型的なことが起きた。私は最も(私にとつて)困難なルート(興味を示していたので)を登ってみないかと丁重に尋ねられた。そのルートは小柄な女性、大岩あき子がリードしているのを『岩と雪』の表紙で見たことがある。「蜘蛛の糸」は薄いクラックですべすべした花こう岩からまっすぐに高く伸び、われわれのお粗末な小屋の上の山側から垂直にそそり立ち、黒い岩ごけのようなもので覆われている壁である。此のルートは僅か一、二年前に登られただけであり、一度だけ特報されたものである。無論私は興味を示した(そして不安を感じたが)。

私のパートナーは芥川でアメリカで去年八月ロッククライミングをしていた古参のスターであり、豪州にもロッククライミングに出かけた。職業としては木耳を採集し料理店などに珍味として売っている。彼は勿論敬意を表して、私を先頭にたてさせた。最初のリードは平凡な5.9フェイスクライムであり、次に、フィンガークラックの下百三十呎でザイルの尖がった先きを持たせられた。ルートの最初の百呎は無事にやれたが、5.11bの浅いフィンガージャムと急傾斜の壁でレイバックし、それから最もむずかしい所に来ると私のアメリカ人の指はそのクラックに入る

らない。このため後退した。ルートをリード出来なかったのは私は芥川がそこをマスタースタイルとするのをじっと見た。彼はその難所の固定ピットの所を迂回して、ピトンなしでそのルートの初登攀を成し遂げた。それから私はザイルのトップでそのルートを試みたが、出っ張りを超えなかった。われわれは降りて、そして休息した。

次の日グレンと私は急なすべすべした花こう岩の壁で「日本のクッキー」と呼ばれている全く違った地域につれてゆかれた。その壁は四ツ五ツの息の詰まるパラレルサイドのクラックに裂けていて、徹頭徹尾むずかしい割れ目である。ここはヨセミテのクッキークリフに似ているが、ずっと高く、けわしく、滑りやすい。ヨセミテの複製のように困難なクラッククライミングが想像を絶するように連続していた。5.10cのワイルドカントリーや5.10dのアストロダムなど、クラシックルートでウォーミングアップをしていたら、「春うらら」5.12を登ってみないか訊かれた(最高にむずかしいルートで、そこは同一型の困難な地域である)。相棒の平松さんは最初のピッチだけを試みてみようと云ったので、私は「君がリードしてくれば、勿論」と言った。そのルートは長くて急で、平松は今迄に五回登っているが、誰にとってもむずかしいものであった。私もむずかしすぎた。一〇呎登った一番の難所で、私は身をかわすための早急な動作がとれず降りてしまった。これが今度の旅行の最後の登り納めであった。私の指は効かなくなり、私の筋肉は痛み、疲れ、私の膝は帰国後直ぐアンカレッジの外科医で痛めつけられた軟骨を取る手術をうけなければならなかったのだ。おまけに翌日は雨が降りそうであった。

山をきれいにグミは持ち帰ろう

海外の山

会 員 通 信

勤務先より米国NBS (国立標準局) 研究所に派遣され、来年四月末までの予定でコロラド州ボウルダに滞在しております。当地はロッキー山脈東麓に位置する美しい町で、私も早速コロラド山岳会に入会しました。今後、四千がの岩と雪を楽しむつもりでおります。情報をご希望の方はご連絡下さい。

小林 岳彦

Takehiko Kobayashi

275 Pearl St., #9 Boulder,

Colorado 80302 U.S.A.

電話 (宅) 303-449-5102

(勤) 404-497-3471

報告

第十四回 山岳史懇談会

マナスル

こぼれ話

図書委員会

第十四回山岳史懇談会は、三月十三日午後六時三十分より、本会ルームにて、マナスル遠征に関わった今西寿雄、小原勝郎、辰沼広吉、山田二郎、松田雄一、大塚博美の六氏を講師にお迎えし、当時のいろいろの思い出話を語っていただくことになった。

開会の挨拶は当委員会担当理事の大橋晋、進行は当委員会委員長近藤信行の両氏により進められ

た。

まず六氏のお話に先立ち、今冬、アルパインスタイルでマナスル初登頂を成し遂げた山田昇会員が、第三次隊の加藤喜一郎氏がマナスルに登頂したさい、頂上に置いてきたピース缶を、その中にあった遠征隊員の名前を書きこんだマナスルとともに持帰ったので、これを今西会長に返還するというセレモニーがあった。

いくぶん色の褪せたそのピース缶は、落雷によると思われる直径一センチほどの穴が二カ所空いており、マナスルはその中に入っていた。当時、特別にデザインされたこの特製マナスルは、酷寒という高度八千のタイムカプセルのような所に置かれたためか、三十年、殆ど損傷なくそのままの状態で置かれていたようだった。この缶が終つてから、その中のマナスル棒を一本とり出しこのマナスルで火を付けようという講師の一人が試みたが、火は付かなかった。しかし、菓のついたその頭の部分をライターに近づけると、消えそうな線香花火のような弱い炎がパツと上がった。山田昇氏の話だと、回収した当時、この缶の中には避雷した穴から舞込んだのか雪が入っていたそうだが、下に降りたらその雪が解け、湿り気が出て箱にかびが生えたという。マナスル箱の中箱に、エンピツでこまごまと書込まれた隊員の名前は充分に

海外の山

グレンと私、そして片方の足の指が全部無い松本正城はそれにもめげず、勇敢に5.9を登り、ウォールクライマーの指導者藤原雅一と平松さん等とマナスル壁へ向かった。アプローチは長くないと安心しながら、夜は三〇皿か四〇皿の昔ながらの日本食が現われた。相当の酒とビールも。無論とっておきのカナディアンクラブを抜いたが、その時は大喝采をうけた。

日本人はアメリカ人と同じアルコール反応をもっている。飲みすぎれば或る者はおしやべりに、或る者はねむくなり、そして或る者はからみやすく、又或る者は吐きそうになる。しかしアメリカ人は大きいし、私とグレンが見せたように、仲々抵抗力もある。次の日は熱い朝風呂に入ったのに東京へ帰る車の中でわれわれの大部分は頭の中がぼんやりしてしまつた。京都のお寺で禅に刺激され、富士登山も経験したジョンと再会した。マークとロージは各々フェイスクライムを楽しんだ。グレンは東京下町にある古いサムライの城のある常盤橋公園に出かけた。われわれは最後の内輪の晝食を鈴木氏とこの旅行中われわれの介添をした松本正城とで会食をした。彼はアメリカ山岳会に入会申込みをした。旅行業の藤原一孝も同席した。彼はまとめ役で、われわれの仲間は一緒か、運転手は、宿は等々の心配をした。

ステーブ・デビスと私はアメリカ山岳会もわれわれを応援してくれると信じ海外委員会から出された交換登山の継続希望書に署名した。われわれは今後アメリカ山岳会交換登山委員会が全般的指導にあたるが、従来通り地方支部と個々の登山家が、今回と同様、実務をする。交換登山は毎年であるが、一年に二回でなく一回きりする。日本とバルデズ双方の個人的訪問はあり得るが、次の年日本側はヨセミテに非常に来たがっているようだったが、正式の交換は必要でないことを私は説明した。彼等は Shawangunks とコロラドの登攀

を考えている。皆が予定通りに来るとすれば、一九八六年の秋に Shawangunks に、アメリカは一九八七年に日本へ、そして日本は一九八八年にコロラドに来る。

われわれは女性達も来ることを期待する。そして、われわれは、日本人を受け入れた連中もふくめ、又有名なクライマーと一緒に、チームを送りたいと願っている。今回われわれは、既に日本人もよく知っている四、五名のクライマーを送った。これに対して日本側は、はっきりと感謝を表していた。

終りに、すくなくとも私にとって、日本との交換登山は驚くほどのことは全くなかった。しかし実際は、期待した以上のことばかりであった。期待以上のすてきな沢山の岩が日本にあり、バルデズには多くのアイスクライムがあり、そして予想以上の大勢の人達がこれに関わっていた。

日本の交通は驚くべきものであり、人達は考えられない程礼儀正しく、景色の美しいことは夢のよう、歓迎はわれわれを全く圧倒し、登攀技術は披露され、テクノロジーは使用され、食べものと飲みもの質と量も信じられない程であった。

韓国山岳会を訪ねて

医療委員会

かねてから韓国山岳会の孫慶錫氏から本会医療委員会に対し、ぜひ訪韓してどうかとの招請があったのを受けて、さる五月二、三日韓国を訪れた。

メンバーは住吉仙也博士を団長に、中島道郎、長尾徳夫、大森薫雄、それにオブザーバーとして竹田寛次監事が参加した。

ソウル市では韓国大学山岳聯盟が主催で高所登

海外の山



山岳史懇談会にて／撮影・滝川 清

申込数及び完成数

種 類	申込数	完成数	完成率
会員用 Aタイプ (30 cm×80 cm)	177 本	119 本	67%
会員用 Bタイプ (30 cm×75 cm)	146 本	95 本	65%
会員用 Cタイプ (27 cm×80 cm)	54 本	27 本	50%
会員用 Dタイプ (27 cm×75 cm)	157 本	82 本	52%
会使用分 Aタイプ (30 cm×80 cm)	10 本	4 本	40%
永久保存用 Aタイプ (30 cm×80 cm)	1 本	1 本	100%
合 計	545 本	328 本	60%

会 計 報 告

収 入 の 部		支 出 の 部	
ピッケル 申 込 金	4,507,000	ピッケル 支払代金	7,364,400
残 金	6,376,000	解 約 金	1,839,000
受取利息	30,965	印 刷 費	83,550
		通 信 費	204,360
		荷 具 費	119,000
		運 賃 費	146,100
		雑 費 金	26,400
		余 金	1,131,155
	10,913,965		10,913,965

(この会計報告は会員用としてのピッケルに関する会計報告です)

の三代目門田正氏が「蜘蛛膜下出血」で倒れられるという事態が発生しました。其の後数度にわたる札帳との連絡の結果、門田製作所は廃業と決定致し、事業は打切らざるを得なくなりました。

なお、最後に鍛ちりました一本を記念として会のルームに残し、記念のプレートを取り付けて永久保存するように致しました。この品は期せずして三代にわたり伝統的ピッケル鍛冶として名を馳せた名門札帳門田の絶品とい

ました。止むを得ず未だお納めしていない申込会員には手紙で事情を説明申し上げ、お詫び致すと共に申込金をご返却申し上げ解約させて頂いた次第です。担当委員と致しましては折角八十周年の記念として企画致し、また多数の会員のご賛同を得て、五三四本(他にJAC用として十一本)という思いもかけぬ大量のお申込みを戴いて進めて参りました事業だけに、今やつと計画の六〇%を消化した時点で挫折致しますことは誠に残念に思いますがこれを以て終結とさせて戴きます。

判読することができた。(この写真は、90号会報に掲載)

第一次マナスル踏査隊から第三次マナスル本隊までに、装備面だけ取上げて、かなりの相違が見られるが、報告書に書かれなかった、二次隊を阻んだサマ部落やスツパにまつわる苦労話などさまざまなエピソードを約二時間にわたって披露していただいた。

いくつか上げられたエピソードのなかで特に迫力があつたのは、三次隊のC4とC5の間で起きた雪崩の話が出たときだった。それまで、どちらかというところばらばらに思い出を語っていた講師たちも、このときは、その場所で大量の雪崩による遭難者を出した韓国隊の話、その雪崩道についての第

一次隊の山田二郎氏の感想、それに最近そこをアルパインスタイルで一気に通る過ぎた山田昇氏の話をはじめながら話題は一つに集中し、懸垂氷河の崩れ落ちるところをC4から見ていた小原勝郎氏から始まり、その雪崩が轟音をたて、雪煙を上げながら崩れ落ちゆく様子を逐一追うように、C4からC5を、C5からC4をお互いに思いやる話など、このとき雪隠にいたというBCの模隊員の様子まで、一気話題は八千からBまで、爆風とともに数千人を駆け落ちた感じだった。C4から十ほどの所を崩れ落ちていくその凄じい雪崩を思い出しながら、その様子を事細かに語る小原氏の話に、シエルたちの献身的な働きや、C4の位置を決める模隊長の極めて慎重だったようす

が偲ばれ、幸運だったという講師の感想から、会場にいた者は一様にその出来事の恐ろしさを目の当りにしたようであった。

(詳細は「山岳」に発表される予定です)。

終了後、講師を囲み、有志で約一時間ほど歓談し、散会した。(岡沢祐吉)

海外の山医学講演会が開催され、ネパールヒマラヤにおけるエキस्पедиションドクターの活動(大森)、海凍傷の治療(長尾)、高所肺水腫(中島)、高所順応について(住吉)、早稲田大学K2隊の記録(竹田)、の講演がおこなわれた。

また大邱市では啓明大学校鄭在泓教授のまねきで啓明大学山岳部主催の高所医学とヒマラヤ遠征セミナーが開催され前述の演題を発表した。いずれも大変な盛会で、韓国ではいま丁度ヒマラヤ鉄の時代、アルパインスタイル、無酸素登山などの

創立八十周年

記念ピッケル事業終了

知識が同時に導入されている時期のようである。これを機会に韓国山岳文化の発展と韓国両国山岳人の友好増進に寄与するところ大であったというところで韓国大学山岳聯盟会長朴東旭氏、啓明大学校長金泰漢氏よりそれぞれに立派な感謝状が送られた。これからも身近に交流を深めていきたいと思っている。

(大森薫雄)

海外の山

門田正氏お見舞募金報告書

(昭和 61 年 8 月 8 日現在)

1. 収入の部
募 金 額……………748,500 円
[募金内訳] 10,000×9 人= 90,000
5,000×48 人=240,000
4,000×1 人= 4,000
3,000×76 人=228,000
2,000×66 人=132,000
1,500×1 人= 1,500
1,000×53 人= 53,000
合計 254 人 748,500
2. 支出の部
募金経費……………44,030 円
[経費内訳]
通 信 費……………32,270
振替手数料……………10,960
銀行送金手数料……………800
合 計……………44,030
3. 差引送金額……………704,470 円

うことになってしまいました。
八十周年ピッケル担当委員会
入沢郁夫

門田正氏お見舞募金

に関する報告

八十周年記念ピッケル製作半ばで、蜘蛛膜下出血のため倒れられた門田正氏に対するお見舞の募金については、ピッケル購入者各位を中心に、会報「山」四九二号でも募金の協力方お願い申し上げましたところ、お蔭様にて七月末日の締切日現在、応募者二五四名、募金額合計七四八、五〇〇円のご協力を得ました。

そこで八月八日、本募金発起人による世話人会を開き、橋本経理担当常務理事の監査・承認を得ましたので、募金に要した経費四四、〇三〇円を差し引いた残額七〇四、四七〇円については、八月

十一日北海道拓殖銀行の門田氏の口座宛送金させて頂きました。
ここに協力をお願いした各位の芳名を記し、厚く御礼申し上げる次第です。

【募金者芳名】

(十口) 内山脩一 宮本忠直 長嶋正浩 竹田寛次 原 蕃 平野明 今西寿雄 重村 清 小田眞道(五口) 梨羽時春 酒井田昇 山本佐介 小林太刀夫 宇田川芳伸 平戸孝夫 高橋早苗 横溝修一 山平 靖 湯川龍二 田辺恵造 麻生國雄 宮原利重 亀井公 高山忠四朗 森信昭二 松村潤 酒井敏明 木村勝久 須貝高善 大木淑子 北原正宣 藤野欣保 森本市郎 藤井 保 今福克也 田辺卓司 牧 繁録 佐藤正雄 小田部学 田中政一 田村義彦 浅利欣吉 鈴木球美 小田稔 佐藤篤孝 横田春雄 橋本誠二 鈴木羊三 大沢伊三郎 青木

図書紹介



山と峠と氷河

成瀬岩雄遺稿集

故名誉会員成瀬岩雄さん(八六五)の遺稿集が本年二月に出版された。ご本人は生前から一本をまとめるつもりでおられたらしいが突然の逝去でそれができなかつた。ご遺族の要望があつて望月達夫、松田雄一両会員が遺稿集の編集と出版の労をとられて立派な本が世に出た。洵に山岳会ならではの心暖まる協力である。

本書は、成瀬さんの前著『山・よき仲間』以降、『山岳』や『山』に発表されたもの以外に『山と溪谷』誌その他山岳関係誌に寄稿された文章の殆どが集められて、紀行、随想、山の人の書物などの四編に分けて編集されている。その外に故人の略歴・登山譜および数名の友人の追悼文が加えられており、文字通りの遺稿集である。

成瀬さんは、明治三十八年(一九〇五)生れで、大正六年(一九一七)から山行をはじめ昭和五十四年(一九七九)まで山を登りつづけ、その間大正十一年(一九二二)にスキーを初めて試み、昭和四十七年(一九七二)までの実に五十年の間スキーも楽しんできた。日本の近代登山の歴史のなかでたいへん息の長い珍らしい登山家の一人である。

紀行には「会津朝日岳の思い出」外十五の文章があるが、『山岳』第六十八年に発表された「スイス紀行赤毛布の旅」が秀逸である。今日、スイス紀行は珍らしくないが、成瀬さんが若いころからいっていた諸々の憧れのスイスの山村の旅の物語りは「成瀬さんでなくては、とても」と思われるような文章である。

随想十編は多彩な内容であるが成瀬岩雄という一登山家の自然観、登山観を伺い知ることができ。つづく山の人編は十名の岳人の思い出を綴った短文であるが、三枝守博、辻村太郎、小川登喜男といった山岳会の先輩会員についてわれわれの知らない側面が述べられていて興味深い。最後の山の書物など五編のうち、「ランの『登山百年史』と『思い出の記』秩父宮雅仁親王文集」の二つの書評は筆者には個人的にとくに興味深い。アーノルド・ラン氏に山とスキーのことを学んだ日本の古い登山家は少なくないはずである。成瀬さんもその一人であり、筆者もランのハウ・トゥー・スキーに熱中したものである。そして『百年史』のなかで故秩父宮殿下についてランに触れていること(第十三章)は成瀬さんのいわれるように「山岳会の会員として大いに喜ぶたい」と思う。したがって『思い出の記』(松方三郎編、昭和三十九年刊)の紹介が一層心にしみる。

本書は生涯静かな山と旅を愛した成瀬さんを知るのにこの上ない本といえよう。
一九八六年二月、茗溪堂発行、A5版、三九九ページ、定価三〇〇〇円
(渡辺兵力)

大下藤次郎

紀行文集

近藤信行編

日本の水彩画の発展に大きな貢献をし、美術雑誌「みづゑ」を創刊してその普及に尽力した明治時代の水彩画家、大下藤次郎が、「みづゑ」に発表したものを纏めた「水彩写生旅行」(一九〇二年、及び「落葉集」

巖 関口正次郎 田中弘美 千谷
 壮之助 中村テール 谷 久光 新
 妻 徹 佐々保雄(四口) 松井辰
 弥(三口) 中村純二 渡辺誠司
 山田二郎 三島昌夫 青木 繁
 渡辺嘉男 小池良吉 若林修二
 飯野 信 松田雄一 平柳一郎
 本田誠也 田原宏史 柴田昌亮
 湯浅充泰 永田好行 石坂久忠
 高沢英雄 森丘 実 大村 肅
 原田 衛 菊地俊彦 中嶋 啓
 三上正治 河西俊郎 小島隼太郎
 佐藤芳久 宝井俊夫 小栗 宏
 垣内康時 大森薫雄 小田島政行
 上條輝夫 桜井善志 吉田 茂
 田高卓士 山内高明 古谷聖司
 島田義昭 楠田トシ子 中野英次
 青木 昇 鈴木雄一 吉中 登
 吉川暢一 田中壮佑 久野英一郎
 山本武志 宿輪浩一 小林 碧
 浅輪幸久 本多厚生 古市義孝
 勝田房治 入谷浩右 松井二夫
 曲田 均 木村 眞 宇野瀬建二
 原田武司 横山 隆 山本康文
 渋谷昭市 瀧島 清 長田義則
 稲垣信生 岩下光男 松本慎太郎
 霜田嘉一 森谷昭男 岡本信夫
 大塚博美 牛山大六 田口二郎
 片岡 博 大坂敏子(二口) 安彦
 六郎 原 康夫 矢尾板二郎 神
 保信雄 柿原謙一 外山義夫 近
 藤浩之 関 孝治 浜野吉生 伊
 藤康二 上善峰男 篠崎長滋 高
 田眞哉 吉沢一郎 林 稔 高遠
 宏 石川紀美 富田記一 佐藤貞
 一郎 大口瑛司 佐藤征郎 田上

敏行 高田健夫 上野英世 細川
 武光 長岩嘉悦 小塩丘平 近藤
 友好 手塚宗求 高野晶三 金森
 繁三郎 高田充克 知久健四郎
 石垣政雄 高倉信孝 岩井芳次郎
 大島康弘 林 清 湯村光典 宇
 津力雄 泉尾忠志 山口 曉 伊
 丹一男 藪内徹男 安彦隆一 高
 辻謙輔 塩沢勝紘 大島省吾 安
 藤英弥 柿本栄二郎 佐山邦彦
 齊藤 晋 立花種則 國生勇男
 船山灸治 望月 力 山寺義雄
 池田 進 月原俊二 藤井良治
 山田武楠 望月福次 太田晃介
 橋本 清 後藤邦慶 坂江善治
 (一・五口) 中西健太郎(一口)
 入沢郁夫 細井澄子 山口滋嗣
 加藤秀夫 高島眞一 菅野弘章
 亀谷外毅雄 大谷洋生 町田 悌
 照内 豊 河原正徳 樋渡順一
 高橋晋作 村木康義 早川良太郎
 山崎 徹 金沢喜八 中村警紀
 山崎 豊 大塩條児 川北 仁
 伊藤敏男 室 次雄 沼 賢亮
 坂本眞生 本吉 博 安藤忠夫
 寺本昭一 齊藤健治 中 保 安
 土武夫 石原金洋 富田弘平 北
 島正八 岡部紀正 久保敏男 伊
 藤博夫 狩野芳郎 田中 茂 西
 信博 近藤信行 渡辺 一 中西
 豊和 蟹江健一 平野 彰 荒木
 健次 岩下香代子 佐々木善民
 小倉童子 山寺仁太郎 岡本忠良
 熊田宗次 吉田 勝以上二五四名
 (文責 松田雄一・平柳一郎)

介として残したものなど多くの紀
 行文章稿、外遊日記、明治四十
 四年に彼が亡くなるまでに残し
 た紀行、絶筆遺稿等から選び出
 して、一冊にまとめたものがこ
 の「大下藤次郎紀行文集」であ
 る。
 巻末に『旅びと大下藤次郎』
 として、編者の近藤氏が、旅び
 ととしての画家、大下藤次郎に
 献じたとしても言えそうな、心暖
 まる、行き届いた解説を載せ大
 下の業績や人となりなどを伝え
 ている。
 山に関心を抱くものは『尾瀬
 沼』、『白峰の麓』などから、魅
 せられたように無意識に「大下
 の手を写生箱に掛けさせた、
 「真に燃え立つような強い明る
 いオレンジ色の落葉樹……」な
 ど、……。原へ出たときは暫時
 口もきけなかった。活きて甲斐
 あることをつくづく感じた」と
 大下に書かせた、人手の入らな
 い無垢の自然を求め歩く、天逝
 間近かな大下の心境を読み取る
 ことができるだろう。そして、
 そこから編者の大下に寄せる気



持をも汲み取ることができよう。
 昭和六十一年一月十五日、美術
 出版社刊、四四五ページ、カラ
 ー図版十六ページ、定価四八〇
 〇円 (岡沢祐吉)
 日本山岳画協会
 創立五十周年
 記念 誌
 日本山岳画協会は本年創立五十
 周年目を迎え、その記念の展覧会
 が七月九日から東京・朝日ア
 ギャラリーで開かれた。展覧会に
 先立って、「山岳画会の古い時代
 にライトを当てて、三十五年を一
 区切として前進への決意を新たに
 したい」との意図で五十周年記念
 誌が発刊された。
 二十数年前の展覧会場のスナッ
 プ、案内状、一九四八年の大町特
 別展の写真などが納められてい
 る。メンバーの思い出の記にこの
 会の歴史が感じられ、各所に配さ
 れた会員の絵が目を楽しませてく
 れる。巻末に協会の略史あり。
 昭和六十一年六月二十日、日本
 山岳画協会発行 五四ページ
 B5判 (泉久恵)

で、「笹子までならそう遠くは
 ない」が十九座、「塩山におり
 る日がやはり一番多い」が十六
 座、「大月で乗換えていく静か
 なる山も数多い」で十二座、計
 四十七座である。
 紀行文は日帰りを原則とした
 山旅随想で、東京から韮崎まで
 を限度とする標高千米級の山々
 について、よくもこれだけまと
 めたものだと思う。同行者には
 必ず康子夫人があり、ほほえま
 しい。一座ごと一文である。
 著者の山旅には木暮・田部大
 先輩の心や、大島亮吉さんの登
 山態度の半面が、根を張ってい
 る。加うるに『甲斐国志』など
 によって山の歴史を納得した
 り、地方の伝承に注目して、
 登行の視野を広くして山を味う
 という気持も強い。こんな個性
 が感銘して再訪三訪もした四十
 七座について、随想文を書いた
 わけだが、当然のことながら、新
 しい山を見つけるための努力が
 あり、「眼光紙背に徹する気持」
 で地形図を読む。文台山(本書
 一六八頁)を発見したのは、そ
 の成果である。また著者は一山
 一回で二丁上がりということに
 せず、「おおかたの山が再訪を
 誘ってやまない」ので、山が
 「また、お会いできて嬉しい」
 というとも述べる。同感を禁じ
 えない。
 筆力には横山さんの個性ある

門田正氏夫人からの礼状

謹啓 残暑お見舞申上げます。

先日、父が上京致しました時には、沢山の御見舞金を戴き、本当に御礼申上げます。

又この度は日本山岳会の会員各位様に呼びかけて頂き、真心のこもった二五三人の御見舞金ありがとうございませう。

名簿も送って頂きましたので、会員名簿の中より住所を見て一人一人に御礼の葉書を出しておきます。

ポーランド隊一行を迎えて

— 関西支部での一・五日 —

三 上 智津子

四月初め東京より「五月にポーランドの登山家が数名来日する予定だが関西で受け入れ可能かどうか」との打診があった。個人的関心もさることながら阿部支部長就任第一回目の行事としてふさわしいものがないか考えていた矢先だったこともあり、さっそく新支部長と相談、前向きに検討したいとの意向を伝える。また大阪府山岳連盟との交流の良い機会でもあるため、共同で話をすすめてみることにし石塚府岳連会長、河本事務局長の内諾を得る。五月に入り具体的計画も決り岳連手配による岩登り競技会優勝者等、若手数名との岩登り交歓会やその他諸々の手

門田正も非常に元気で退院致しました。言語障害、健忘症はまだまだ時間がかかると思いますが、リハビリしながら頑張っております。

真心こもったお見舞金を無にしない様、「何か」を色々と考えているのですが、又その時はお知らせ致したいと思っております。

ご協力戴きました会員の皆様には、呉々も宜しくお伝え下さい。

右御礼申上げます。

八月十八日 門田順子 代筆

(平柳一郎・松田雄一宛)

紹介 特色が生きており、柔らかくかつ軽妙な文章は、私を知らぬ山にも誘いこむ。カバーにあるガイド・エッセイという単語は、CODには無いが、一座ごとのエッセイには地形図名と略図やコースタイムも付記され、かつ簡便な注記もある。ガイド・エッセイとはうまい単語だと思

った。画や写真もきれいである。

一九八六年四月一日刊 実業之日本社 一九七ページ 七〇〇円

(柿原謙一)

冬山ライチョウ

生息調査報告書

五三・五八及び五九年度

冬山雷鳥生息 研究会編

本書は一九七九年から八五年までの毎年三月、室堂平周辺で実施されたライチョウの生息状況の観察・調査報告書である。野鳥のほとんどが小型であり、飛び去ってしまう(多くは地球規模の渡りをしていく)ことから、生態観察には制約が多く、移動・繁殖など解明されていないことが多いのである。夏山では身近に見られるライチョウだが、一年のうち六ヶ月以上も雪深い高地で生活しており、雪の中の探餌行動、ね

ぐらほどこか、雄と雌の関係、など不明の点が多い。これらを解明して保護策を期そうと言う富山県のアナウンサーの苦勞に満ちた観察記録である。吹雪と氷点下の雪原で飛来を待ち、じつと観察をする忍耐強さは、ライチョウに対する深い愛情がなくては出来ないことである。

七年間にわたる冬期調査で、いくつかの興味ある行動が発見され報告されているが、調べる程に神秘はますます増えていくというのが調査に参加した人達の実感のようだ。

厳しい気象条件下での観察行動には制約が多い、また限られた人員と日数での調査活動では性急に成果を期待すべきではないかも知れないが、今後は、個体ごとの行動追跡、それぞれの群れの行動比較のデータ集積などに調査が進められることだろう。四季を通じての報告書(ツガイ形成・繁殖・家族崩壊の過程)を期待したい。

この種の調査記録としては、長野県側の爺ヶ岳周辺で一九六一、六四年に実施されたものが『雷鳥の生活』として大町山岳博物館から発行(今年四月復刊)されている。これを読み比べてみると立山のライチョウが爺ヶ岳のものとは、群れの形成・ねぐら、などに違いがあるのに驚かされる。こうなると北岳のライチョウは一体どういう生活をしているのだろうか

か、富士山に移殖されたものは本当に絶滅してしまったのだろうかかと私たちトリキチには興味がつきない。

報告書は、県民は全力をあげて人間とライチョウの平和共存の道を考え、保護意識の向上につとめなければならないと強調している。

生息環境が急激に変化していくこのごろ、山にかかりを持つ者として、何らかのカタチで行動を起したい気持ちにかられる報告書である。

昭和六十年三月発行、富山県刊 B5版各六七ページ、三七ページ

(松沢節夫)

黒部別山

黒部の衆編

黒部別山は、黒部川の中流域に位置する藪に覆われた標高わずかに二五三〇の山だ。しかし黒部川側は、冠松次郎が「黒部川の王様」と称賛したように、高距一三〇〇を誇る大岩壁となっている。冬のエベレストに近った竹中昇は「一見すると確かに藪山であるし、剣の本峰からは何の変哲もない丘にさえ見える。が、一転して後立山から眺めると、大岩壁である。急峻なりッジ、ルンゼを持つ魅力ある登山対象と化す。この不可思議

図書紹介

子、杉本鉄男・真美子、三上博民・智津子の六名。さっそく二台の車に分乗して出発。六甲山最高峰を通過し十国展望台とケーブル山頂駅にて一休みの後、芝生の広がる記念碑台でベンチに緋毛せんを広げ昼食とする。重箱から次々と現れる杉本夫人手作りのご馳走に全員歓声をあげる。まずはワインで乾杯。日・英・ボ語が飛び交って話はずんだ。のんびりした昼食の後、裏六甲を下り有馬温泉でひと風呂あびる。公衆浴場は初めての二人、最初はビククリした様だが大喜び、頭を洗いヒゲを削り満足そうな顔で出てきた。ロビーで一服の後、大阪に向け出発。十六時、会食会場のパークホテル着。主賓の二人を囲み阿部和行関西支部長、石塚彰府岳連会長、通訳の西前四郎氏、講演をお願いした重広恒夫氏、東京の神崎忠男氏、そして三上の八名で懇談。十八時、講演会場となっている観公園の科学技術センターへ。

開演三十分前、すでに百名近くの参加者でホッと胸をなでおろす。十八時三十分、久野英一郎関西支部委員長の司会によりスタート。まず阿部支部長のあいさつに続き重広恒夫氏の講演「冬季ヒマラヤ登山の意義」、次にザヴァダ氏による「チョ・オユーのスライドとエベレストの映画」、そして活発な質疑応答がかわされ、最後に石塚府岳連会長のあいさつと東京から

来阪された神崎氏より「今回のボ隊来日の意義と来年のポーランド招待登山の説明」で締めくくられた。参加者約百三十名。大成功であった。講演会終了後近くの居酒屋に関西支部と府岳連の有志三十五名が集まりザヴァダ、チヒ両氏を囲んで打ち上げ会。そして二十二時三十分、一日のハードスケジュールを終え奈良の久野邸へ向う。

翌日は久野英一郎氏と「エベレスト女性隊長」だった英子夫人と共に以前から希望されていた東大寺の大仏を見物、若草山にも登り二時すぎ京都駅で富士山に同行される神崎氏にバトンタッチ。かくして阿部新支部長就任第一回目の行事は無事、成功のうちに終了することができた。

ポーランド隊

一行の来松

信濃支部

五月二十八日、あずさ7号で松本に着いた一行を蒲生支部長と田中、及び市観光課の高橋係長とで迎える。

すぐ車で松本市役所に向かう。今夏松本で開かれる国際アルピニスト大会のオープニングとして、松本市長を表敬訪問するため。東京からはボ隊歓迎委員長神崎忠男氏、松田評議員、岡沢、絹川阿理事、松本正城氏がこれに加わった。

「黒部別山」は、この不思議な魅力を持った黒部別山と、隣接する黒部丸山の登攀ルート約七〇本を解説し、あわせて積雪期の黒部別山周辺の主要登攀記録、詳細な登攀年表を収録、三二〇ページに及ぶ克明な地域研究書である。

編者の黒部の衆は「文献の孫引きはせず、直接現地を調べ、初登攀者には確認すること」を基本方針としたために、完成までに七年間、準備期間を含めると、二十年間を必要としたという。

しかし、その努力ゆえに、一夜にして地形を一変させる夏の

大勢の報告関係者が待つ市長室で、和合市長とボ隊一行は、岡沢理事の通訳で挨拶を交したあと、しばらく両国の親善を深める話し合いがなされ、和合市長からは松本の民芸品「手鞠り」が全員に、ザヴァダ隊長からはポーランドの民俗人形と山岳会のペンダントが松本市に贈られた。

濁流や、冬の凶暴なホウ雪崩など、黒部の持つ、荒々しく、また雄々しい自然のダイナミズムと、そこで果たされた人間の営為が、見事に明かされていく。数多い地域研究書の中でも「古典」となる内容の充実ぶりだ。

しかし本書の本当の価値は別にあり、日本の山をヒマラヤのステップと考えずに、むしろ日本の山が持つ大きなダイナミズムに着目し、魅了された登山者が、堂々と黒部別山に対峙したことにある。とりわけ、黒部の衆は、この黒山に「土着の山登り」の価値を見い出した人々だ。所属山岳会を超えて集まった大野明氏を代表とする十六人の衆人は、クライマーというより、やや古風な岳人という表現がぴったりの登山家たちだ。

小原正氏、信大の山田哲雄教授らと歓談したあと、松本城の加藤管理事務所長らの出迎えを受け、松本城内を見学した。木材で作った城は珍しかったらしく、全員、天守閣まで登った。

ポーランドには美人が多いのか、女性を見る目は確かなようだが、ボ隊の一人が山城の庭で一緒に写真を撮ろうと捕まえた女性が、たまたま松本に来ていたミス日本だったのは驚かされた。

このあとセイコー・エプソン松本事業所の工場見学を本道松本市



タカウツコネツソウ
山崎、花根に

本書の行間には、真摯に山に向かう黒部の衆の「日本の登山とは何か、本物の登山家とは何か」といった問いかけが、満ちあふれて、単なる地域研究書を超えた、登山史に残る書物である。

菊版・函入上製本、本文三〇五・グラビア二ページ、自家本、問い合わせ先 〇三三 飯能市仲町9-21 加藤伊介方 頒価四〇〇〇円

(永田秀樹)

ポ隊は、穂高や屏風岩などで山登りを楽しみ、支部創立四〇周年記念祝賀会に出席し、ウェストン祭ではポランド民謡を唄うなどして、長野県での数日を過ごし東京へ戻った。
(田中弘美)

ポランド隊の工場見学

ポランド隊の来日が決まり、その歓迎方法に關し、日本ポランド協会副会長の山田耕之介先生(立教大学経済学部教授)からご意見をうかがった際、山登りの案内もよいが、折角遠々日本まで来られるのだから、出来れば日本の先端技術の工場でもお見せしたら喜ぶでしょうとのアドバイスを戴いた。

五月二十六日夜のシンボジウム打ち合せの折、滞日中に見学したい場所であればと希望を聞いたところ、早速次のような要望を受けた。

それによると、先ず第一に見たいところは、コンピュータ関係のハイテク工場。これについては「日本へ来てハイテクの工場を見ないで帰るのは、バチカンへ行つてローマ法王に会わないで帰るようなものだ」とのこと、先ずは第一希望。次いで最新鋭の乗用車組立工場の見学。更に直接ヒマラヤ登山に關係のある太陽電池、衛星からの気象図を受像するファクシミリ装置等についても関心のあ

ることがわかった。

そこでハイテク工場については、早速、田中評議員→松本商工会議所→松本市商工部長を通じて、セイコー・エプソン(株)の工場見学をお願いした。一行は五月二十八日、高地への入山の途次、エプソン(株)表示体事業部の松本事業所の液晶板工場を視察することができたが、超クリーンな無人に近い工場に驚きの目をみはつていた。なおこの見学については松本市商工部長の本道重徳氏に大変お世話になったことを記して謝意を表します。

自動車工場の視察については、山田副会長→日産トレーディング(株)滝田社長を通じて、日産自動車車の座間工場の見学をお願いしたが、六月四日の午後、チャールス皇太子・ダイアナ王妃の見学の際と同じメニユーで、ロボットによる無人溶接工程と、多品種を同一のラインで処理する乗用車の組立ラインを見学することができた。同工場総務部の天野専任課長と同行した通訳の吉野好子さんの懇切な説明により、日本の自動車産業の実体を知ることが出来たと

思う。彼らの関心は、このようなロボットによる無人化に伴う失業問題等、その点について熱心に質問していた。

太陽電池については、宿舎に近いシャープ(株)東京支店を六月三日午後訪問、ここでも西堀元会

長の關係もあつて、寺師副社長室長から懇切な説明を受けた。

更に翌日の私学会館におけるパティの席では、シャープ(株)製の太陽電池を穂高小屋などに設置して成果を上げている幾徳工業大学の島居亮、重村清、森武昭等三先生からも、実用面での説明を聞くことができ、日本製太陽電池の性能につき納得がいった様子であった。

ファクシミリについては、坂下直枝氏が資料を取り寄せて下さり、更に六月二十二日には芳野越夫氏がワルシャワ訪問の途次、ザヴァダ氏や気象担当者に技術的な説明をしてくれた等である。
(松田雄一)

夕張岳に高山植物をたずねて

北海道支部

北海道支部夏山行は、夕張岳(一六六七・八)を、六年振りに再訪することとした。

七月五日(土)地下鉄新札幌駅から、自家用車に分乗、夕張岳に向けて出発。山形県吹浦と言うと、札幌の姉妹都市ポランドから、ロジャー・コーネルさんが参加、北海道支部も、この頃は、国際化繁忙である。

午後四時過ぎ、ペンケモユウバロ川滝ノ沢林道終点より夕張岳ヒュッテに着く。宿泊の手続きを済

ませ、早速、夕餉の支度とともに、野田副支部長の音頭で、ビールの乾盃となる。その後は、スコッチ、国産高級ウイスキー、焼酎等で、入山の宴が盛大に行なわれ、成吉思汗鍋、肉、実質七キログラムが、胃袋に吸収される。支部運営についてのキツイ注文をされる御仁もあり、事務局痛く恐縮する。

六日(日)四時半頃には、殆どの方が起床、朝食後、午前五時ヒュッテを出発、夕張岳を目指す。冷水の沢で喉を潤し、前岳の裾、望岳台(一三〇〇)に出ると、針盛岳、ポントナシベツ岳、芦別岳、幾春別岳が望まれる。憩沢で、再度、冷水を口に含むと元氣百倍、前岳湿原へ歩を進めると、高山植物の群落となる。ハクサンイチゲ、ユウバリリンドウ、ムシトリスミレ、ミヤマオグルマ等を眺めて、次々に花が代り、タカネタンポポ、シソバキスミレ、ユウバリソウ、ユウバリキンバイと続いている。午前九時二十分頂上で一同萬歳を三唱、よく冷えたビールで乾盃、昼食を摂る。十時三十分下山にかかる。午後二時、ヒュッテで少憩後、車まで歩き出すと、一天俄かに沛然たる驟雨に遭遇する。

この山行に参加された皆様、本当に有難うございました。

参加者 野田四郎、佐々木喜一、高澤光雄、菅原修三、菅原慶子、

ルーム日誌

七月

3日(木) 海外委
8日(火) 学生部前期納会
9日(水) 理事会、常務理事会
10日(木) 山研委、三ヶ国合同登山打ち合わせ
14日(月) 総務委
17日(木) 図書委
18日(金) フィルム委
22日(火) 婦人懇談会
25日(金) 三ヶ国合同登山打ち合わせ
28日(月) 総務委
29日(火) 自然保護委
今月の来室者24名

会員移動

退会

4362 愛澤尚太郎
8629 根岸 知
8746 真鍋 周三

物故

3721 平沢亀一郎(6・26)
8263 大森常三郎(7・14)
3083 金坂 一郎(7・19)
1698 木原 均(7・27)
終身会員へ
5709 小倉 厚(6・28)

図 書 受 入 報 告 1

図 書 委 員 会

昭和 60 年 11 月分受入図書(つづき)

4. 吉村ひろ子編著「恵那山百態」アートセンター日額 1985 (吉村ひろ子氏寄贈)
5. 森沢堅次編「ふみあと 9号」玉川機械金属株式会社山岳部 1985 (版元寄贈)
6. 渡辺兵力著「山旅の足音」茗溪堂 1985 (版元寄贈)
7. 渡辺兵力著「山旅の足音」茗溪堂 1985 (渡辺兵力氏寄贈)
8. 足利武三著「日本の名峰 27 阿蘇・九重・祖母」山と溪谷社 (版元寄贈)
9. 谷亀利一編「黄河源流を探る」読売新聞社 1985 (江本嘉伸氏寄贈)
10. 辻村太郎著「辻村太郎著作集 1 火山と氷河」平凡社 1985 (版元寄贈)
11. スーパーガイド・アジア編集部編「スーパーガイド・アジア 8 中国・上海編、チベット・雲南・長江流域」JICC 出版局 1985 (増島達夫氏寄贈)

昭和 60 年 12 月分受入図書

1. 見學玄著「句集 莫逆」五季の会 1985 (見學玄氏寄贈)
2. 六甲山友会「ゆずりは 潤沢岳遭難追悼号」六甲山友会 1985 (福原洋一氏寄贈)
3. 植野稔著「日本の溪流釣り」山と溪谷社 1985 (版元寄贈)
4. 松本保彦編「雪山 '86 入門と案内」山と溪谷社 1985 (版元寄贈)
5. 日本ネパール協会編「シンポジウム・ネパール 第 13 回ネパール研究学会」日本ネパール協会 1985 (版元寄贈)
6. 日本体育図書館協議会雑誌目録編集委員会編「日本体育図書館協議会雑誌目録 外国雑誌編」日本体育図書館協議会

1985 (版元寄贈)

7. R.C.F. ショーンバーグ著「オクサスとインダスの間に」論創社 1985 (版元寄贈)
8. 神戸市公園緑化協会編「花時計」神戸市公園緑化協会 1985 (版元寄贈)
9. 第四次日本中国合同登山技術研修隊「友交の阿尼瑪郷 1984 日中合同登山技術研修 第四次日中合同登山技術研修隊 1985 (版元寄贈)
10. 弘前大学理学部付属雪害観測所編「弘前大学理学部雪害観測所報告 4号」弘前大学理学部付属雪害観測所 1985 (版元寄贈)
11. 坂井久光編「聳嶺 第 12 号」一等三角点研究会 1985 (版元寄贈)
12. 上田茂春編「山書研究 29 号」日本山書の会 1985 (水野勉氏寄贈)
13. 日本登高会編「会報 自第一号 至第五十六号」日本登高会 (版元寄贈)
14. 日本登高会編「会報 自第五十八号 至七十三号」日本登高会 (版元寄贈)
15. 田淵行男著「黄色いテント」実業之日本社 1985 (版元寄贈)
16. 水野勉著「外国人と日本の山 人と本」未来工房 1985 (著者寄贈)
17. 水野勉著「アルプス 人と本」未来工房 1985 (著者寄贈)
18. 上田茂春著「山書研究 26 号」日本山書の会 昭和 57 (水野勉氏寄贈)
19. 上田茂春著「山書研究 28 号」日本山書の会 昭和 60 (水野勉氏寄贈)
20. R. レイフィールド著「山書研究 30 号」日本山書の会 昭和 60 (水野勉氏寄贈)

R. Kogure's Memorial Library (つづき)

Nihon Sangakukai

- Lunn, A. : The Alps (The Home University Library)
 Philip, G. : Philips Handy-Volume Atlas of the World
 Squadron Leader The Marquess of Douglas and Clydesdale :
 The Pilot's Book of Everest
 The Houston-Mount Everest Expedition 1933... First over
 Everest
 Younghusband, F. : The Epic of Mount Everest
 : Jahrbuch des Schweizer Alpenclubs... Zebtrakjinnutee
 des Schweizer Alpenclubs (1929)
 : Zeitschrift des Deutschen und Oesterreichischen Al-
 pen-Vereins (1929) Geleitet von Hanns Barth
 Finsterwalder, R. und 3 Manne : Forschung am Nanga Parbat
 Deutsche Himalaja-Expedition 1934
 Williams, J.H. : Yosemite and its High Sierra
 Bechtold, F. : Deutsche am Nanga Parbat der Angriff 1934
 Bechtold, F. : Nanga Parbat Adventure... Translated By
 H.E.G. Tyndale
 Rutledge, H. : Everest 1933
 Bruce, C.G. : The Assault on mount Everest 1922
 Hawared-Bury, C.K. : Mount Everest... The Reconnaissance,
 1921
 Du Faur, F. : The Conquest of Mount Cock
 Norton, E.F. : The Fight for Everest... 1924
 Rutledge, H. : EVEREST : The Unfinished Adventure
 Workman, F.B. : The Call of the snow Hisper
 Workman, F.B. : Ice-Bound Heights of the Mustergh
 Dutton, E.A.T. : Kenya Mountain
 Mumm, A.L. : Five Months in the Himalaya
 FitzGerald, E.A. : The Highest Andes
 Conway, W.M. : Climbing and Exploration in the Karakoram-
 Himalaya
 Merzbacher, G. : Aus den Hochregionen des Kaukasuses... vol.
 1, 2.
 Hedin, S. : Big Horse's Flight : The trail of War in Central
 Asia
 Hedin, S. : Across the Gobi Desert
 Bauer, P. : Um den Kantsch
 Seligman, G. : Snow Structure and ski Fields
 Borchers, P. : Die Weisse Kordillere
 Dyrenfurth, G.O. : HIMALAJA Unsere Expedition 1930
 Thomson, J. : Durch Massai-Land Forschungsreise in Osta-
 frika
 Hedin, S. : My Life as an Explorer
 Smythe, F.S. : The Kanchenjunga Adventure
 Finch, G.I. : The making of a Mountaineer
 Alai-Pamir Expedition 1928
 Sknine, C.P. : Chinese Central Asia
 Knowlton, E. : The Naked Mountain
 Young, G.W. : Mountain Craft
 Ward, F.K. : The Riddle of the Tsangpo Gorges
 Visser-Hooft : Amounthe Karakoram Gracies
 Smythe, F.S. : Kamet Conquered
 Workman, W.H. : Two Summers in the Ice-Wilds of Eastern
 Karakoram
 Weston, W. : The Japanese Alps
 Tilman, H.W. : The Ascent of Nanda Devi
 Freshfield : Round Kangchen Junga
 : Alpine Journals 257, 228
 Hermann Adolphe and Robert De Schlagintweit : Results of
 a Scientific Mission to India and High Asia 4 vols.
 Hermann Adolphe and Robert De Schlagintweit : Text books
 for above
 : Records of the Survey of India, vol. 15.
 : The Central Tian Shan
 : Nanga 1934
 : Search of Himalaya
 : Image Himalaya

図書受入報告2 図書委員会

21. 田中清光著「山と詩人」文京書房 1985 (版元寄贈)

昭和61年1月分受入図書

1. 吉田昭市著「日本の名峰 26 大山と中国山地」山溪と谷社 1986 (版元寄贈)

2. 西尾寿一編「溪谷 第9号 北関東特集号」京都山の会 1980 (版元寄贈)

3. 広島三朗著「K2 登頂 幸運と友情の山」潮出版社 1986 (版元寄贈)

4. 近藤信行編「大下藤次郎紀行文集」美術出版社 1986 (編者

寄贈)

5. 川村宏著「近代登山の父 W. ウェストンと神戸」1985 (著者寄贈)

6. アルド・レオポルド著「野性のうたが聞こえる」森林書房 1986 (版元寄贈)

7. 内田修著「日本の名峰 23 穂高連峰と乗鞍岳」山と溪谷社 1986 (版元寄贈)

8. 佐藤久尚編「針葉樹 第1号復刻」針葉樹会 昭和60 (版元寄贈)

9. 吉澤一郎編「針葉樹 第2号」針葉樹会 (版元寄贈)

10. 山崎安治著「新稿日本登山史」白水社 1986 (版元寄贈)

●山岳図書

交換会開催

読書の秋の恒例の山岳図書交換会を本年も左記の通り開催いたしますので、ご参加の程お願い申し上げます。

記

期日 昭和六十一年十月二十五日

(土)

場所 本会ルーム

開場 午後二時

なお、本交換会の趣旨は、各位の読み終った本、あるいは不用本を、お互い持ち寄って、欲しい本と交換しようというものです。交換出品ご希望の方は、希望価格を添えて、九月末日迄に、図書委員会までお送り下さいますようお願い申し上げます。

図書委員会

●還暦セーター頒布

従来一部の会員の間に胸にJACの文字とご本人の還暦年号を入れた赤いセーターを作り着用されておりましたが、最近このセー



☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

Iを作ってほしいというご要望が多くきかれますので総務委員会左記により一括製作することに致しました。ご希望の方は事務局までご連絡下さい。申込書送付申上げます。

記

申込資格 還暦過ぎの会員

価格 一万二千元

寸法 S M L

申込締切日 十月末日

なお各寸法見本がルームに展示してあります。

総務委員会

* 越後支部結成四十周年

●記念晩餐会と

貉ヶ森山

期日 十月十八日(土)～十九日(日)

(日)

会場 麒麟山温泉 松仙閣 磐越西線津川駅下車 バス十分

・十八日 松仙閣で午後四時より受付開始、六時開会。出席者に記念品を進呈。

晩餐会の席上で越後支部永年会員表彰。高齢(古稀以上)会員に祝い品を贈る。

・十九日 松仙閣から車で室谷、峰越林道を経て、紅葉の貉ヶ森山(一三二五、一等三角点)へ登る(車道より徒歩で往復約一時間)

会費 一二、〇〇〇円

申込み 支部会員外のご参加も歓迎

迎します。十月六日までに越後支部事務所(〒951 新潟市営所通一番町 学生書房)へ会費を添えてお申込みください。詳細のご案内をお送りいたします。

※麒麟山温泉は阿賀野川の清流に臨む麒麟山麓の鄙びた湯の街。松仙閣は文人墨客に親しまれた、由緒ある旅館です。貉ヶ森山は新編会津風土記に「狸ヶ森山 高二百九十五丈、一に十二岳と称す。近頃村民狸ヶ森と称す。字体の近きに因て訛れるなるべし。遠く望めば群山の上に秀出し、積翠空に浮び、御神楽岳と並び峙つ」と書かれ、登山者の訪れも稀れな山上から展望する、岩越国境の山々の佇いは旅愁を誘うことでしょう。

* 第二十九回

●紅葉会案内(静岡)

秋たけなわの南アルプス南部の大井川、寸又川にもみじをたずねます。

日時 昭和六十一年十一月八日(土) 九日(日)

宿泊 SL列車の運転で有名な大井川鉄道経営の寸又(すまた)温泉「山の家」

集合場所・時間 大井川鉄道「金谷駅」前(東海道線金谷駅下車)十二時五十分までに集合。十三時発千頭行きに団体乗車しますから遅れないように早めにお集まり下さい。

行事 十一月八日 午後三時ころ寸又温泉着、午後五時より「山の家」にて懇親会開催。

九日朝八時朝食後、現地解散。(昼食弁当は用意します)

解散後の行程は(A) 沢口山登山(B) 寸又川探勝(C) 井川富士見峠・静岡 等があります。

会費 一〇、〇〇〇円

解散後の温泉からの帰路交通費は自己負担です。金谷駅までの運賃約二二五〇円、又は井川經由静岡駅まで約二七五〇円。

申込 郵便振替による会費振込をもって正式の申込とします。宿泊人員の限度が四〇名のため満員になり次第締め切らせて頂きます。

振替口座番号ならびに連絡先 郵便振替口座 名古屋九一五〇八五六 日本山岳会静岡支部紅葉会(山本朋三郎)宛。

* シンポジウム

●ヒマラヤのエコロジ

第三回の「ヒマラヤのエコロジ」に関するシンポジウムを左記の通り行いますので、関心のある方々の参加をお願い致します。

日時 昭和六十一年十一月十五日(土) 午後一時半～五時半

会場 東京都教育会館、地下鉄東西線「神楽坂」下車、神楽坂口より徒歩一分、赤城神社隣

会費 千円(予稿集代等)
主催 (社) 日本山岳会

(社) 日本ネパール協会
なお、シンポジウムに引き続き同じ会場で懇親会を開きます。懇親会にも振ってご参加下さい(会費、三千円)

テーマの詳細、講師については次号でお知らせします。「ヒマラヤのエコロジー」について研究された方で、講師を希望される方は(社) 日本山岳会内の科学研究委員会または自然保護委員会にご連絡下さい。なおシンポジウム、懇親会とも会員外の参加も歓迎。

科学研究委員会
自然保護委員会

●現地小集会

山は訪れるたびに、新しい姿を見せてくれます。六十一年度後半の現地小集会は「明るい静かな山」をテーマにしました。ご都合の良い日や登りたい山を選び、ぜひ、ご参加下さい。

①七ヶ岳 一、六三六メートル
十月五日(日) 会津線糸沢駅八時集合

上越から飯豊の山までも眺められる一等三角点の山。長い滑をつめ、頂を次々と踏む。

歩行時間 六時間 ☆☆
②岩殿山 六三四メートル

十二月二十一日(日) 中央線大月駅九時集合

六十一年の忘年山行。岩殿山から稚児落しに縦走する。稚児落しの岩壁は一見の価値あり。

歩行時間 三時間半 ☆
③八方尾根スキー集会

一月十七日・十八日。詳細は次回。

④庚申山 一九〇一メートル
二月一日(日) 銀山平八時集合

(足尾線通洞駅からタクシーで銀山平へ入れます)

厳冬の山。積雪一層。岩壁の間をラッセルして頂上に立つ。

歩行時間 六・八時間 ☆☆
⑤鷹岳 一〇一五メートル

三月二十九日(日) 下仁田駅九時半集合

二つの岩峰からなる西上州の代表ともいえる山。三月はヤブもうるさくない。

歩行時間 五時間 ☆☆
(注) ☆は難度です。☆☆は家族の方も一緒に。☆☆☆は岩稜や鎖場がちよつとあり、体力も少し必要。

申込み先 集会委員会または事務局まで 集会委員会

●京都支部北山の紅葉を愛でる自然保護集会

京都大学の吉村健次郎氏の案内で、ブナ、スギの原生林見学やキノコ採取・三国峠(七七六メートル)登山など秋の北山を存分に楽しんでもらおう計画です。お誘いあ

わせのうえ、早めにお申し込みください。

日時 十一月八、九日
場所 京大青生演習林

会費 五千円
※問い合わせと申し込みは吉村健次郎(京大 075-751-2111 内線 2411) 上原泰行(西本願寺 075-751-1911)まで。

●信濃支部創立 四〇周年記念山行

当支部創立四〇年の記念山行を、山の温泉中房に集い、昔から信濃富士と安曇の人々に親しまれた有明山(二二六三)で行ないます。会員各位のご参加をお待ちしております。

日時 十一月八日(土)、九日(日)
場所 中房温泉に八日午後五時までに集合、六日より懇親会。九日、有明山に登り、下山して現地解散。松電バス連絡なし。タクシーは片道約四千五百円。

参加費 七千円
申込締切 十月三十一日まで

〒三九九一八二 長野県南安曇郡豊科町高家 中野和郎(0263-72-3349)

信濃支部

●九州山の集い 86.みやまき

(本会の行事予定の支部懇談会

が、今年度より各地域で順番に実施されることとなった第一回目の会合)

日時・場所 十一月二日一四時
宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井、国民宿舎高千穂荘。三日八時三〇分、五ヶ所高原三秀台。九時、第二回みやまきウェストン祭。一〇時解散後は祖母山へ記念登山(自由参加)。

参加申込 九月三十日ころまで
〒八八〇 宮崎県大橋三二六五、大谷優方

日本山岳会宮崎支部 0985-515554

●東九州で 自然保護全国集会

日時 十一月一日(土) 受付、二日(日)、三日(文化の日)
会場 大分県別府市、豊泉荘。宇目町視察、傾山登山
参加費 一泊一万円、二泊三日(六食付) 一万八千五百円

自然保護委員会

●マナスル登頂三〇周年記念マナスルトレッキング

今西会長が総隊長として参加されます。
まだ若干名の余裕がありますので、なるべく早く参加のご通知を下されるようお願いいたします。
※十月四日、午後三時よりルーム

で説明会を開きます。 海外委員会

会報委員会よりお願い

八月号、九月号会報のお手元に届く日が遅れご迷惑をお掛けしております。現在、技報堂の印刷工場が移転中で、その影響を少々受けています。このため月初めの催しのお知らせについては、その前々月の会報に載せるのがよろしいと思います。通常、会報の原稿締切日は毎月十日ですが、現状が改善されるまで月初めの催しのお知らせについては、前々月の五日頃(会報発行日の約十五日前)まで締切日を遅らせてみます。但し、この場合は通常の締切日(毎月十日)まで当委員会あて、決定済事項のみ原稿用紙に書きこみ、未決定の部分は空欄にして(この部分は遅らせた締切日まで)郵送してください。

会報編集委員会

昭和六十一年九月二十日発行
100 東京都千代田区四番町五一四 サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会
発行者 今 西 寿 雄
編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(03) 四四三三三
振替口座 東京三三三三三三三三
東京都港区六本木三ノ一ノ三〇

印刷所 株式会社 技 報 堂

ABビル